●座談会●

多様化する入試制度の功罪

西澤　茂●上智大学教授

大西直樹●国際基督教大学教授

松本亮三●東海大学教授

林　篤裕●大学入試センター教授

司会

安藏伸治●明治大学教授・本連盟広報委員会委員長

――敬称略――

進む入試の多様化

安藏　本日の座談会は、入試という大学における永遠のテーマを取り上げたいと思います。

現在多くの大学で、多様な入試制度を導入しています。ＡＯ入試はその代表とも言えるものですが、昨年来、ＡＯ入試が問題視されるようになり、九州大学をはじめいくつかの大学でＡＯ入試をとりやめるという話が出てきています。

いま、ＡＯ入試で入学してくる学生が四万二千人程度、推薦入試で入学してくる学生が二十二万人程度います。つまり、約二十五万人強が推薦入試、あるいはＡＯ入試で入ってくるということで、これが大学入学者の約四割を占める時代になっています。

ＡＯ入試は早期に行われるため、いわゆる「青田買い」をしている側面がありますし、学力を問わない場合が多く、質の問題を問われることもあります。

私は明治大学政治経済学部に所属してい

ますが、私どもの場合、現在十五種類の入試を行っています。いわゆる三科目の一般入試、全学部で共通の入試、センター試験を利用して、利用期間を前期、後期に分けてそれぞれ五つの科目方式による入試、その他附属校三校からの推薦入試、スポーツ選手対象の入試、外国人留学生、帰国子女入試を入れますと、十五種類になります。

さらに、二・三年生から入ってくる編入試験と学士入学も入れますと、全部で十八種類の入り口があります。

そういう意味では非常に多様な人材を入れているのですが、はたしてそれがいい方法なのかどうか、恒常的な少子社会のもとで、入試を行う本来の意味や方法などを考え直すべき時期に来ているのではないかと思います。

ちょうど本年三月に、私大連盟の教育研究委員会から『私立大学入学生の学力保障―大学入試の課題と提言―』というレポートが出されましたので、委員長である松本先生から、その概要についてお話しいただきたいと思います。

入試の安易化には歯止めが必要

松本　私大連盟の教育研究委員会では、この問題についてこれまでにも数度にわたってレポートを出してきました。

その中の一つに、平成十六年三月に出した『日本の高等教育の再構築に向けて〔Ⅱ〕：16の提言　大学生の質の保証―入学から卒業まで―』があります。

ゆとり教育などの問題から、高校生の学力が低くなっています。その中で、国が入試制度の多様化ということで、学力考査のみにとらわれない試験制度の導入を進めてきましたが、AO入試が、ある意味で青田買い的な様相を呈してきているのではないか、学力を保障する必要があるのではないかということを考えました。

それで、一つには大学入試センター試験（以下、センター試験）をもっと活用してはどうかということを提言しました。

学力の低下は特に理工系では深刻な問題になっており、リメディアル教育で補うなど何らかの形で学力保障をしている状況があります。

しかし、学力保障をするにあたり、個々の大学であらゆる試験問題を作成するのは大変な負担になりますし、また誤りも多いため、センター試験などを活用して、統一試験を行うことを考えてはどうかということです。

私立大学はそれぞれの建学の精神に基づいた教育を行うわけですので、AO入試は必要ではあるのですが、学力担保も必要であること、さらに高等学校での履修状況を考えるうえで、調査書もきちんと活用すべきであるということも述べました。

そして、入試科目数をあまりにも少なくしないこと、入学決定の過度な早期化をしないように申し合わせるべきではないかということを、提言として出しました。

このレポートはかなりインパクトがあったようで、高等学校の校長会などでも取り上げていただき、私も講演をいたしました。

ところが、なかなか実情は改まりません。昨年度から、もう一度入り口の問題を考え

西澤 茂氏

てみようということになり、本日の出席者でもある西澤先生にも加わっていただいて議論をし、平成十九年度の報告を上梓したわけです。

最低限の学力保障は必要

松本　結論としては、「16の提言」と同じことになりました。つまり、状況が全く変わっていないどころか、入試の安易化がさらに進んできてしまったということです。ですから、入り口で大学生の学力をきちんと保障しなければならないだろうと考えました。

大西 直樹氏

もちろん、学力の保障は大学入学以降の教育によるところが大きく、最終的には卒業生の質の保証が必要です。

けれども、四年間で教育できる範囲にも限りがありますから、入学段階でもある程度学力担保をしていかなければいけないだろうということです。

そういうところから、もう一度入試制度を見直すべきであるということを提言しています。

提言は大きく言えば二点あります。一点目は、AO入試はこれからやっていかなければならないという前提のうえで、いわゆるカリキュラム・ポリシー、ディプロマ・ポリシーを考えたうえでアドミッション・ポリシーをきちんと決めて、学力担保をしつつ入試制度を変えるということです。

安藏 伸治氏

もう一つは、学力担保をするうえでは、やはり統一試験のような制度が必要ではないかということです。

これは、アメリカのSATやACT、あるいはヨーロッパ諸国のさまざまな高等学校卒業試験を見ても言えることです。レポートではこのような結論を出しました。

安藏　西澤先生、付け加えてご発言いた

だけますか。

建学の精神を全面に出した入試を導入

西澤　いま松本先生のお話に出てきました『私立大学入学生の学力保障―大学入試の課題と提言―』というレポートの作成にかかわらせていただき、私の場合は、特にAO入試についての議論を中心に検討いたしました。

日本のAO入試は、慶應義塾大学の湘南藤沢キャンパスが本格的に導入したのが十八年前の一九九〇年になりますが、それをきっかけとして、アメリカ型の入試制度として、日本でも徐々に浸透してきました。

この数年間は導入する大学もかなり増えており、上智大学でも、昨年度初めて導入いたしました。

本学の成果については、まだ学生が入学したばかりなので、今後、AO入試で入学した学生の大学での適応力、学力の総合評価をしたうえで判定していきたいと考えていますが、基本的にはいままでにない新しい試みとして、建学の精神を全面にうたった入試制度になっています。

私立大学全体が今後それぞれの個性を生かして大学教育に励んでいかなければ生き残れない時代にあって、建学の精神に合った学生かどうかを判別の基準にするというのは、一つの画期的な方法ではないかと思っています。

アメリカでは、ほとんどの大学でAO入試を行っています。例えば、コロンビア大学はニューヨークにありますから、「都市型に合った学生」ということも選考の基準に入れるなど、自らの大学の建学の精神や地の利を生かした学生募集を行っているのです。

そういうわけで、受験生の個性と大学の個性の一致を見る入試制度として、AO入試がより発展していくのは望ましいであろうというのがまず一つの結論です。

ただ、一方で現実問題としては、すでにご指摘されているようなさまざまな弊害が出ています。最大の問題は、やはり学力担保の問題です。

アメリカの場合、AO入試といっても、実は書類審査だけではなく、きちんとした学力試験を受けさせたうえで審査していま

松本　亮三氏

林　篤裕氏

すので、学力担保はされているのです。

一方、日本のＡＯ入試においては、学力担保がないままに書類審査のみで実行されています。そして、早い段階で選考していますので、学力の保障がされないまま、受験生が早い段階で勉強をやめてしまうという弊害もあります。

そういう点をかんがみると、やはり学力担保の方法を考えていかなければ、日本の大学のレベルが下がってしまう可能性があることは否定できません。

短期的解決策としては、センター試験を活用するのは一つの方法であると思いますが、試験には、高等学校レベルで最低限勉強しなければならない水準を満たしているかどうかを測る試験と、一番から順番をつけていく試験があると思います。

学力担保といった場合には、前者の試験制度が必要であり、これはおそらくセンター試験とは少し違った内容になると思いますので、私大連盟独自の高校生の学力担保の試験を作成することが必要であろうと思います。

ただ、それには時間と労力がかかりますから、短期的にはすでにあるセンター試験を活用するのは一つの方法であると思います。

求められるアドミッション・オフィサーの育成

西澤　もう一点、ＡＯ入試について今回のレポートでまとめたのは、大学側の選考基準の問題です。

ＡＯ入試による青田買いが指摘されていますが、現状としては、できるだけ早い段階で入学者を確保したいがために、言葉は悪いのですが、ＡＯ入試を乱用してしまっている現実があると思います。

この点については、申し合わせ事項として、私大連盟として共通な形でのマニュアルを作る必要があると思いますが、それだけでは十分ではなく、やはり選考基準の問題があると思います。実際に本当に大学に合った学生を選びきれているのかどうかということです。

そこには、選ぶ側の資質の問題があるのではないでしょうか。どういう形で面接をするのかという共通の基準やきちんとしたマニュアルがないままに、各先生方の独自の判断で面接をして評価しているという実態が多いのではないかということです。

アメリカの大学の場合には、アドミッション・オフィスがあって、選考する専門のスタッフが常駐していますが、日本の場合には、そういった専門のスタッフを抱えている大学はごくわずかであり、適切な学生を選抜できている状況にはありません。

そういった点も踏まえて、アドミッション・オフィスの設置や専門職員の育成、また選考基準を明確に出すことによって、日本のＡＯ入試制度も発展する余地があるのではないかというのが、今回まとめたレポートの骨子です。

安藏　二人の先生方から非常に広範にわたって、多様化する入試制度についてご指摘いただきました。

国際基督教大学では、アドミッション・オフィスの仕組みをつくって、専門職の人たちを育成しながら入試をしてきた経緯が

あるとお伺いしております。このあたりのところを、いまご指摘があったような問題点も含めて大西先生にご発言いただければと思います。

適切なＡＯ入試は優秀な学生確保を可能に

大西　去年から広報センター長として、いろいろな高等学校を回りながら感じたことは、入試が多様化してきている一方で、大学の選び方については従来の基準でしか考えられていないということです。つまり、高校生は相変わらず大学の偏差値と知名度の高さなどをもとに大学を選んでいます。

他方、大学側は、より多くの受験生を獲得することのみを求めて入試改革を行うという、双方ともあるべき姿からは全く違った方向に進んできていると思います。

アドミッション・オフィサーというのは、相当に高い専門性をもって学生を選びます。国際基督教大学では、九月入学選考における書類選考で、アメリカの大学などのアドミッション・オフィスによる入試に近い選考を行ってきていますが、日本で言うＡＯ入試というのは、自己推薦入試ととらえるのが妥当であり、アドミッション・オフィスの本来の意味に沿った入試とは異なるものです。

アドミッション・オフィスによる入試は、本来、一人ひとりの受験生を丁寧に審査するもので、受験生の数より、優秀な学生を獲得することを目的に行われるものです。しかし、日本のＡＯ入試の現状は、残念ながらその方向に動いていないことを指摘したいと思います。

受験料収入が大きな割合を占める日本の大学の財政構造において、考え方を変えるのは難しいのかもしれません。

ＡＯ入試のもう一つの問題として、受験時期の早期化があります。これにより高等学校の教育は支障を来しており、一方で大学では就職活動が相当早く始まっていますから、入り口と出口の両方の部分で、求められる学びが妨げられていることは深刻な問題だと思います。

ＡＯ入試は、きちんとした基準をもって行えば優秀な学生は集まります。国際基督教大学の場合は、応募資格として高等学校調査書の評定平均値を示し、一定基準の学力をもつ生徒を対象としています。

一次選考の書類選考では、高等学校の成績に加え、ＴＯＥＦＬなどの英語検定試験の成績、願書、長短二種類の小論文と推薦状二通を総合的に評価します。

願書も比較的長い文章を書かせるようになっていますが、特に推薦状は細かく項目を指定し、それぞれの項目についてのコメントを求める書式を用意しています。

生徒自身が書いた文章に加え、客観的評価として複数の推薦状を合わせて評価していることは非常に重要な要素であると思います。

書類選考に合格した生徒に対して実施する二次選考は、当日与えられる資料をもとに受験生がグループディスカッションをして、その様子を面接官が評価するというものです。最後には意見をまとめて代表者が発表しますが、どのようにディスカッションを組み立て、誰が発表するのかまでをそ

の場でグループ内で決めることになり、その過程がすべて評価されます。

国際基督教大学のＡＯ入試では、リーダーとしての資質を高く評価していることから「スペシャル・アドミッション」とも呼んでいます。

実際、入学してきた学生のパフォーマンスを調べてみると、実によく勉強しています。また、授業においても非常に積極的で、この入試での入学者は少数ながらも波紋のように周囲の学生によい刺激を与えており、そういった意味でもスペシャルな学生が獲得できていると言えます。

安藏　先ほど西澤先生から、上智大学で建学の精神を組み込んだＡＯ入試を行ったとお話がありました。具体的にはどのような形で行われているのでしょうか。

西澤　もともと、推薦入試で入った学生の成績はいいという結果は出ていましたので、推薦入試と同じような枠組みで学生がとれないかということを考えました。

まず、提出する書類としては、高等学校の成績と推薦状を重視しました。それから、上智大学の場合は、ＡＯ入試と申しましても、学科ごとに若干違うのですが、基本的には学力試験を行って、学科の適性を判断しています。

二日間に分けて試験を行っているのですが、一日目は、ＡＯ入試委員会といって、全学レベルで選抜された教員と職員のスタッフが、大学への適性、建学の精神への適性を面接にて判断しました。

二日目は学科ごとの面接を実施して、学科への適性も判断しました。学力試験とともに、大学で十分学ぶだけの基礎能力があるかどうかを個別に判断するのです。

その総合評価で選抜しているので、ほかの大学で行われているＡＯ入試とは趣を異にしているかもしれません。やはり学力面での担保をかなり重視している点が特徴だと思います。

なりふりかまわぬ学生確保が問題

大西　ＡＯ入試の枠が何人で、何人受験して、何人合格したといった数字は公表されていますか。

西澤　しています。

大西　そういったことは一般的にほかの大学でも公表されているのでしょうか。

松本　はっきりした数を発表していない大学もかなりあるだろうと思います。

先生方がおっしゃったことに同感なのですが、いま日本で行われているＡＯ入試というのは、本来の意味でのＡＯ入試ではないのです。

昨年度までは、私も頑強にＡＯ入試とは言わず、ＡＯ型入試と呼んでいたのですが、あまりにもＡＯ入試という名前が普及しているので、今回のレポートでは初めてＡＯ入試という呼び名を使いました。

いまお伺いした上智大学、国際基督教大学は非常にきちんとした形でＡＯ入試を行っていると思いますが、問題は何かというと、私立大学の四割が定員割れを起こしているときに、学生を確保するために、ＡＯ入試という名前でなりふりかまわず学生をかき集めているということで、それが日本の大学生の質を下げてしまっていることだ

と思います。

西澤　今回のレポートにも、情報開示が大変重要だという指摘をしています。

何をしているのかという情報開示をするだけで、かなり自浄能力が働いて、少しは青田買いのような無節操な選抜方法は改善されるのではないかと思います。

センター試験は日本版ＳＡＴに代わるか

林　先ほど、日本版ＳＡＴが必要であるというお話がありましたが、それはセンター試験では補えないのでしょうか。

大西　センター試験が代わりになればそれが一番かもしれませんが、センター試験は科目が細分化されていますよね。ＳＡＴやＡＣＴは「言語能力」と「数的能力」などの枠で能力を測っており、高校生の学習到達度を見るには、そのような形のほうが都合がいいと思います。

安藏　ＳＡＴやＡＣＴは、年六、七回受験できますが、センター試験は高校三年生の一月にしか受けられません。ですから、せめて年間二回ぐらい実施できれば、その中のベストスコアを出すということができると思います。二回実施するのは難しいのでしょうか。

林　複数回実施することによる問題というのは、まず監督の問題です。いま、二日間の監督でさえ大変であるところを、あと数回やるといったときに、大学の先生方に納得いただけるのかどうかというのが大きな問題だろうと思います。

それから高等学校側がどう反応するかだと思います。つい先月も、高等学校の先生方とお話をする機会があったのですが、センター試験を冬以外も実施するということになると、その対策が非常に困るとおっしゃいます。

先ほど、早期化という言葉が出ましたけれど、センター試験を十二月にやろうとしても理解が得られずに、また一月に戻ったわけですが、実施時期からして相当タッチしにくい部分があります。

それを複数回やるときに、試験の対策はしなくていいのだと申し上げても、やはり高等学校の先生方も実績を問われるので、非常に困るという意見があります。

それから作題者の確保の問題もあります。大学入試センターは、無尽蔵に問題をつくれるわけではありませんので、大学の先生方に非常にご協力をいただいています。

四百五十人程度が携わり、二年間かけて問題をつくっていますが、非常に時間的余裕のない中でつくっていただいて、なおかつ二年間かかっています。それを、倍の二回やるとすれば、当然二倍の先生方にご協力いただかなければ対応できません。

最後に、ＳＡＴは年に七回、ＡＣＴは年に六回行われていますが、それぞれの試験の比較ができるような問題作成になっています。

なぜそういったことができるかというと、アメリカの場合は、問題をほとんど秘匿しているからです。受験生もそのあたりはわかっているのか、文化の問題だと思うのですが、今日はこんな問題が出題されたという情報を予備校などに伝えることはしないわけです。

ですので、テスト機関はそれぞれの試験問題がどういう性能をもつのかをわかったうえで問題を作成しているので、それぞれの回で比較することができるのです。

ところが、日本はアイテムを公開していますので、同じ問題をもう一度使うことに関してはいろいろな議論があります。

最近、試験問題の再利用もいいのではないかということも言われていますが、それをやったときの反応というのは予想しがたいものがあるように思いますので、複数回やるということに関しても、考えるべき課題が多くあります。

統一試験とAO入試を組み合わせて

松本　先ほどの安藏先生のお話でも、二十種類近くの試験が行われているということでしたが、細かく分けていくと、各大学でもそれぞれいの数の入試を行っていると思います。そうすると、同じ年の入学者のスタンダードが非常に複雑化してしまっていることになります。

学生間に大きな学力差がある中で、一つの教育課程において教育していくとなると、リメディアル教育も必要です。そうすると、就職活動に一年かかるとして、大学の教育期間は実質二年ぐらいしかなくなってしまうという非常に大きな問題が生じます。

本来ならば、学力に対するスタンダードを一本化することが望ましいはずです。その場合に、自分の大学で試験問題をつくる労力と試験監督に要する労力がもしなくなれば、センター試験とは申しませんが、統一試験を国として複数回実施するだけの資源は大学から提供できるかもしれません。

それから、すべての試験に等価性を要求することは、いまの状況では無理でしょう。もしすべてがAO入試に代わってしまえば、AO入試が実施されるような期間で二、三回試験を実施して、その後の判定は、受け入れる側の大学が責任をもって行うという形態にしなければとてもやっていけないだろうと思います。

先ほどご紹介したレポートも、実は私立大学だけの問題ではなくて、むしろ国に対する政策提言のような趣もあるわけです。私立大学だけを改善すれば済むという問題ではありません。国公私立大学を通して、こういう形でやろうという政策ができてくれば、統一試験の複数回実施は可能だと思います。

林先生にお伺いしたいのですが、中央教育審議会から「学士課程教育の再構築に向けて（審議経過報告）」が出ていますが、その中で提言されている「高大接続テスト」については、大学入試センターのほうではどのような議論がなされているのでしょうか。

林　大学入試センターではまだ具体的な議論になっていないのですが、実施時期の早い試験は高等学校としては困るという見解があることは先ほどもご紹介したとおりですので、「高大接続テスト」を導入するとなれば、高等学校側に相当丁寧に説明しなければ受け入れられないのではないかというのが私の個人的な考えです。

松本　高等学校の先生方からお話を聞くと、特に進学校の先生方というのは、AO入試をやめてほしいとおっしゃいます。

AO入試を実施したとしても、最後にセンター試験だけは受けさせてほしい、そうしなければ最後まで勉強せず、ほかの一般入試を受ける生徒たちの妨害になるという話は聞きますね。

林　つまり、一月にセンター試験を行っているのは、高等学校の教育が全部終わった段階で評価をしてほしいということなのです。やはり三年間まとめて教育をしたいのであって、三年の夏から手を入れられるのは困るとおっしゃっているのだろうと思います。

私も大学人ですから、基本的には試験対策はやめてほしいと思っています。試験対策の必要のない試験を夏にやってはどうか。つまり、高校生の本当の姿が見たいと思うのですが、それを高等学校の先生方に申し上げると、やるからにはやはり対策をとらなければならないのだとおっしゃられます。

それは、目の前に生徒がいる先生方からすればある意味当然の反応と言えるのですが、大学人にとっては、その場限りの対策を講じた学生を受け取るよりは、素の学生の評価がしたいという気はしていますので、対策の必要のない試験を実施できればいいのですが、これは永遠の課題のような気がいたします。

入試形態別の追跡調査結果を入試改革につなげて

安藏　いろいろご議論いただきましたが、ここで、別の問題提起をしたいと思います。

私の所属学部で入試形態別に学生のGPAの経過を調べてみましたところ、指定校推薦で入学した学生が一番いい成績を収めていることがわかりました。

それから、センター試験を利用した入試を行っているのですが、おもしろいことに、六教科の入試で入った学生の成績がつねによくて、次に四教科、そして三教科による入試で入った学生が一番下になりました。つまり、複数の科目をとった学生のほうが入試の得点率は低くなる傾向がありますが、低くても大学に入ってからしっかり勉強するのです。

いままでいろいろな入試を行ってきましたが、入試形態別の追跡調査をして、その結果を見ながら入試改革をしていかなくてはならないのではないかと思います。

先ほど松本先生、西澤先生にご指摘いただいたように、本当に大学の建学の精神を理解して、それに沿って育ってくれる学生をとる方法を真剣に考えなくてはならない時期に来ているのではないかと感じます。

そこで大学入試センターのほうも、もう少し使い勝手のいい試験をご提言いただければうまくいくのではないかと思いますが。

林　センター試験は、当然のことですが、皆さんと共同で行う試験でありまして、強いてやらされているといった関係ではありませんので、皆さんのリクエストになるべく沿った形で変化していければと思っています。

大西　いまお話を伺っていると、やはり本来はSATのような試験をつくって運用するのが一番理想的かもしれませんが、その困難は相当なものですね。

それであればセンター試験を使わせてもらうのがいいような気はするのですが、一

番のネックは、やはり教員が入試にかかわらないと我慢できないというメンタリティーの問題があることです。

それから、現行の制度では一点違いで合否が決定するような状況があります。そう考えると、総合的に見て判断することのできるＡＯ入試が広がるのはいい傾向だと思うのですが、問題は、そうしたときに受験者数が減っていくということと、きちんとやろうとすると、その手間が非常にかかるという点です。

国際基督教大学では、たった四十人ぐらいの学生をとるためのことですから何とか対処できるのですけれど、それが何百人、何千人になると、非常な労力が必要です。

そういう問題があるので、ＡＯ入試に移行するということも、超えるべき課題が多いとは思います。

安藏　高等学校の評定平均の出し方についても問題があって、追跡調査をすると評定平均が高いはずなのに、大学のＧＰＡは低いものが出てくる場合もあります。

林　つまり、高等学校から出される資料に疑義があり、内申書の評価が選抜資料として使えないということになっているわけです。

安藏先生がおっしゃるように、内申書の信頼性を高めていただければ、ＳＡＴのようなものは必要ないと思うのです。両方が真摯に対応すれば、もう少し学生の受け渡しがうまくいくという気はしています。

試験問題の再利用も考えては

安藏　先ほどお話に出た試験問題の再利用ですけれども、日本での実現はやはり難しいのでしょうか。

例えば、私大連盟加盟の百二十四大学がすべて入試を行っています。その中である程度問題を厳選して入試データブックのようなものを作成し、それを公開してもいいと思うのです。

そこからランダムに出すということにすれば、百二十四大学の過去五年間分の問題数だけでも膨大な量になってくると思います。そういうことは考えられませんか。

林　それは考えられると思います。個人としても、百科事典のような問題集をつくって、この中から例えば六割を出し、残りの四割は新作を出すかもしれないという形にしてはどうかと思います。

学生がどれだけ勉強したかを測るようにしたほうが作題者の労力も減るでしょうし、学生も素直に勉強してくれるのではないかと思います。

西澤　私は先ほど、入試の制度として、選抜するための試験と高等学校の学力基準を担保するための試験と二種類あると申し上げましたが、高等学校の学力基準を担保する試験というのは、理想形としては、「これだけの本の中から必ず出す」という形だと思います。

そうすれば、山をかけるといったこともなくなってくるでしょうし、まさにわれわれが求めている基本レベルの学力が判定できると思うのです。

そうした試験制度ができれば、作題する負担も運用するコストも減るでしょうし、高校生としても、これだけやれば必ず合格

するということがわかってくるでしょうし、とてもよいと思います。

松本　要するに、いまの日本の入試構造がそのようになっていないということなのですよね。

先ほど大西先生もおっしゃったように、一点刻みでの合否判定というのは、結局、顔が見えない受験生に対して学力考査だけを課して選ぶときには、そうせざるを得なかったわけです。

でもそうではなくて、今後はアメリカ型のＡＯ入試でやっていこうとするならば、多面的な要素を含まなければなりませんから、一点刻みの試験は意味がありません。

ですから、同じ問題を繰り返し使いつつ、ある程度の基礎力を測ることができればいいのであって、それ以外の部分で、エッセーを書かせるなど、総合的な評価に基づいて選んでいくことができるはずです。

ただ、最低限の学力保障は必要です。このような基礎学力を測る試験といまのセンター試験のあり方は違うと思います。ですから、本当にそのように機能させるとすれば、センター試験でやるとしても、試験の基本的な構造を変えていかなければならないだろうと思います。

入り口から出口まで一貫した教育を

林　いま、入り口の話をしていますけれども、アメリカと比較すると、出口の部分の違いが大きいと思います。

つまり、自分が四年間どう勉強して何を獲得するかということが求められるアメリカ的な大学と、四年が経過すれば自動的に卒業証書が授与される大学ではやはり違います。

もちろん入り口での変化も必要ですが、当然中身の問題が問われてくるわけで、卒業するにはこれだけのハードルを越えなければ出られないということにすれば、一点や二点の差は関係なくなるのだろうと思います。

松本　日本の高等学校にしても大学にしても、ディプロマを出すというのは年数でしかありません。達成度で評価していないことがまずおかしいのです。

本当に大学教育の質の保証を考えるには、出口からさかのぼらなければならないことは確かで、われわれが平成十六年に出したレポートにはその視点を入れて、「入学時の質の保証から卒業時の質の保証へ」ということを書いています。

そこからさかのぼって見ていった結果、やはり入学時の学力の担保は必要だということで、卒業時の質保証という視点は、今年のレポートにおいても変わっていません。

安藏　大学が教育目標を達成する人材を社会に送り出すために、卒業時に学生にどの程度の学力を与えて、そのためにどういう教育をするのかを設定する。そこからさかのぼっていけば、教育理念がカリキュラムにも影響してくるし、また学生選抜に影響してきます。

西澤　まさにそれが建学の精神であって、うちの大学に来ればこういう人材を育成して、その結果、こういう社会人として活躍していますよ、ということが高校生に伝えられるようになれば、大学に対するイメー

ジがよりわくでしょう。

実は、AO入試を上智大学で導入するにあたっては、教員にアドミッション・ポリシーをきちんと理解してもらって、それに基づいてきちんとカリキュラムを組んでもらうということが一つの大きな目的としてありました。

アドミッション・ポリシーを掲げているのは、入り口だけで言っているのではなくて、大学の教育全体の仕組みとして浸透させることが重要で、一貫した大学教育を行うべきなのです。

個々の大学によってどういう特徴があるのか、その特徴を生かした教育の仕組みをきちんとつくっているかということを考えてみると、実はほとんど議論されていなかった現状があると思うので、逆にいい機会ではないかと思っています。

そういう意味も含めて、アドミッション・オフィスと教員が一体化して、アドミッション・ポリシーを反映した学生選抜にかかわることによって、教育の姿勢も大きく変わるのではないかと期待しています。

その成果が出るのは数年後ですが、何か新しい方向づけができれば、一つの入試制度としては確立できるのではないかと思っています。

林　一つ宣伝をさせていただきたいのですが、私が所属する大学入試センター研究開発部というのは、成績の分析や試験の研究を行っています。

実際の学生の成績を扱いますから、研究成果がこのような形で出たということをなかなかオープンにできないところはあるのですが、大学運営をしていくうえでは非常に重要な部分であると思います。

つまり、試験問題をどう分析するか、入学者がどういう振る舞いをするのか、追跡調査はどのように行うのかといったことについて、多少われわれは知見をもっておりますので、声をかけていただければ、可能なかぎりは協力したいと思っています。

今年であれば五月の下旬に、全国大学入学者選抜研究連絡協議会を開催するのですが、どの大学の方でもご参加いただけますので、来ていただければ、そういう話もお聞きいただけると思います。

情報の共有と連携が大切

西澤　いま伺っていると、やはり情報の共有が重要なのかなと思います。

いままでは、個々の大学が独自の方法で選考から教育のすべてを行ってきましたが、ほかの大学で何をやっているかということについて、お互いに情報を共有していません。また、大学入試センターとの情報共有もしておらず、そこに大きな問題があると思います。

そして高等学校との間でも本来は情報を共有して、いい学生をいかに発掘し、またその才能をどう伸ばしていくかという部分で連携をとらなければならないと思うのですが、お互いにもっている情報を隠しているところがあり、それが大きな問題なのだろうと思います。

現状よりももっと公明正大に情報を共有して、より優秀な学生を発掘し、それを育てるにはどうしたらいいかということをい

ろいろな部署で連携し合うことができれば、よりよい学生を育てていく仕組みができる気がします。

林　情報を共有することは非常にいいことなのですが、大学としてはやはりほかの大学に手の内を明かしたくない部分はあると思います。出せる部分、出せない部分、両方あると思います。

ですから、例えば試験問題の解析の仕方や追跡調査の仕方ということぐらいは他大学を参考にしながら行うだけでもずいぶん効果があるのではないかと思います。

先ほど西澤先生のお話の中で、公開するということをおっしゃられましたが、公開することで入試が公明正大になるかどうかということは、私は一概に利点ばかりではないように感じています。

つまり、AO入試というのは、入学を許可する側が主観をもって行う入試だと思います。その対極にあるのが科目試験入試ですから、AO入試というのは、ある意味あまりオープンにしすぎると非常に主観が出しにくくなるだろうと思います。

安藏　公開するというのは、メソッドの公開だと思います。そういう部分で、大学入試センター等が中心になって取り組んでいただいたり、あるいは私大連盟のほうでも勉強会のようなものができれば、新しい改革に結びつくと思います。

大西　いまお話が出たこと以外で私が大変気になっているのは、メディアや予備校の問題です。メディアと予備校は偏差値による大学の振り分けしか頭になくて、それに高校生が振り回されています。

いろいろな高等学校を回る中でも、やはり旧態依然とした大学のランクづけの中で、何が勉強したいかではなくて、偏差値がこのぐらいだからこの大学という決め方をされている現実がありますから、その問題性についても何かメッセージを発していかなければならないと思います。

松本　日本の入試構造、あるいは教育構造の問題であって、これは国を挙げて大改革しなければ、小手先ではどうにもならなくなっているのではないかというのが私の実感です。

多様な学生は私学の力

林　私立大学にとって「多様な学生を獲得する」ということは、やはり必要なのでしょうか。つまり、入学してからの教育が成り立たないというのは、非常に多様な学生がいるからで、教育はしにくいだろうと思うのです。

「多様な」というのは、学習履歴はなるべく同一で考え方が多様である、という意味であるとは思うのですが、多様な入試を行うがゆえに、多様な学習履歴の学生が一つの教室に入ってしまっていることを考えると、AO入試をあまり活発にしないほうがいいのではないかという論にもなりかねません。

もちろん、科目試験だけでいいという意味ではないのですが、教室の中の均質性、学力履歴の均質性をいかに保つかを目標にしてもいいのではないかという気はします。

安藏　それは非常に教育の基本にかかわる問いかけです。

例えば私どもの学部では、非常に多様な学生がいます。全員にＴＯＥＩＣの試験を課しますと、百点台から九百点超までいるのです。つまり、下手をすればアルファベットを全部書けない学生から、母国語レベルの学生までいます。英語という尺度だけで測ればそうなります。

ところが、百メートル走る能力を見ると、オリンピックで金メダルをとってくるような学生もいれば、十メートルも走れないで転んでしまう学生までいるわけです。それもやはり能力であるわけです。

私の所属学部は大きな学部ですから、すべてをみんな同じ教室に入れて、同じことを教えて、同じ尺度で測らなくても、年間に千五百以上の授業が動いていますから、それぞれみんな違う授業をとって、違った形で能力を高め合うことができるのです。

多様な入試制度で入れるということは、多様なクラスも用意して、その中で、学部としてのパワーをもっていくということも一つの教育の姿勢ではあるわけです。

全部同じ型の中で優秀な学生をつくるのであれば、やはりそれは学力試験だけで判定すればよいと思いますが、その中では、オリンピックで金メダルをとる学生は出てきません。あるいは経営のトップになる人は育たないかもしれないということです。

林　それはそのとおりですね。

教養教育の充実で学生の底上げを

大西　アメリカの場合を考えてみると、日本の高校生のように受験勉強をしていない生徒もたくさんいますから、高校生の能力というのは相当ばらばらです。

それを大学一・二年生のときにすごく勉強させるわけです。教養教育がとても充実していますから、専門に入ったときにぐんと能力が伸びるわけです。

そういう意味では、日本においても、教養教育を一・二年でしっかりすることが求められているのではないでしょうか。一・二年で、大学の専門課程のレベルにまで上げることです。

日本の大学では、入り口から専門を学ぶものだと考えているところがあるため、均一性が必要になり、多様な学生が入ってくるのは困るということになるのだと思います。そうではなく、一・二年でしっかり教育することが求められます。

安藏　それから、一・二年終了後に、他の専攻に変えられるということも重要です。そういう柔軟性がなく、「本学の教育はこれだけです」というところで、できる子だけを伸ばすということであれば科目試験だけでいいと思いますが、それはやはり私立大学の精神に反すると思います。

やはり、建学の精神や教育理念に沿った学生を育てることが私立大学の使命ですから、多様性の中でお互いに切磋琢磨して人格を高めていくことが私立大学の教育だと思います。

松本　しかし現状を見てみると、科目試験で合格した学生と、ＡＯ入試で合格した学生と入り口のスタンダードが多様でありすぎるという問題があるわけですから、ある一定の基礎学力を担保する必要はあるのでしょう。

そのうえで、多様な人間を受け入れるという姿勢で臨むのが理想的だと思います。その後どう教育していくかというのは、大学教育の責任になります。

安藏　それこそまさに最初の西澤先生のお話ではありませんが、高等学校の学力基準を担保できるような試験を行って、あとは各大学が教育をして、出口の質保証をきちんとしていくことが求められているのではないでしょうか。

西澤　上智大学は、実は数少ないセンター試験を使っていない大学の一つです。なぜ使わないかというと、まさに物理的制約の問題で、二日間といいながらも、その時間を割くには厳しいことが一つ、もう一つは、出題者を出すように言われたときに、その余力がないということも理由です。

逆に、センター試験を導入することによるメリットを考えたときに、学力担保が一番大きなポイントになると思いますが、それについては、一般入試でも、AO入試その他の推薦入試等でも学力担保の試験を個別にやっていますので、十分カバーできていると考えています。

自前で全部やったほうがいいのか、統一的にやったほうがいいのかという判断はかなり分かれるところで、上智大学は自前で一応何とかやっているという状況があるということです。

ただ、本当にそれですべて完結しているかというと、確かに問題も多々ありますので、今後、センター試験の導入について検討する必要はあると思います。

松本　しかし、考えなければいけないのは、各大学が個別に入試問題をつくり、行うということが、本当にいいのかどうかということです。

それは教員の側にとっても大きな負担になっているし、間違いの原因にもなります。また、そういった時間を教育にもっと振り向けることもできるはずです。

ですから、そういう負担を取り除くためにも、共通テストは役に立ちます。その実施については、日本のあらゆる大学からほんの少しずつの労力を投入すれば、大きな力になると思うのです。

各大学はそれを利用しながら自分の大学に合った学生をとっていき、教育研究に集中するのが望ましいのではないかという気がします。

入試の再構築は大学教育の再構築

安藏　私学の場合には、建学の精神や教育理念に合った学生を輩出しなくてはいけませんので、大学の存在意義をもう一度考え直して、入試を再構築しなければならない時期に来たのではないかと思います。

高等学校の学力基準を測るような形にするか、あるいは入試問題の再利用ができるような形にすれば、AO入試の質の担保ができて、それが大学教育の再構築の第一歩になるのではないかと思います。

本当の意味での優秀な学生を選抜する入試を考えなくてはいけない時期に来たことを改めて実感しました。

（二〇〇八・三・三十一　私学会館）

※「学力保証」は文部科学省表記に倣い、「学力保障」と表記しています。